

議題（１） 小3以降への少人数教育について

1 小3以降の少人数教育の方向性について

◇ これまでの検討委員会での意見

- ・ 小学校3年生が35人の場合、小学校2年生の25人から小学校3年生へのギャップが大きいため、ギャップを小さくするため3年生の学級編制の基準を下げることを望ましい。
- ・ ある地域の調査において、不登校傾向が始まったと思われる時期が一番多かったのが、1年生が37%、次いで多かったのが、3年生の17%。その次は2年生の14%と続くという結果が示されている。
- ・ 3年生にも児童一人一人にきめ細かな指導を行うことができる少人数学級を導入することが求められている。
- ・ 少人数教育の推進により、一人一人の教職員がゆとりを持って子供たちに接することが可能となり、働き方改革に資する。 など

◇ 考えられる方向性

- 小学校3年生も国の35人学級編制の基準を上回る基準が望ましい。

2 小3以降の学級規模について

◇ 25人の学級規模と30人の学級規模において考えられる特徴

- ※ これまでの検討委員会での意見と事務局で付加した内容
- ※ どちらかの規模の優位性を示すものではなく、それぞれの規模の特徴を示したもの

【25人の学級規模】

- ・ 1、2年生と同様の規模であり、教師と児童が接する機会が多く児童の安心感がある。
- ・ 自己肯定感、学力の向上、不登校やいじめ問題の解消につながる。
- ・ 教員と児童、児童同士の関係が深まり安定した雰囲気の中で学ぶことが可能である。
- ・ 学習面、発達面でステップアップする3、4年生の時期に、教師が児童に丁寧に指導できる環境がつけられている。

- ・ 教師と児童の距離感が近くなり、児童に対する教師の目が行き届く。
- ・ 教材・教具など個別の準備、実験などの具体的活動がしやすくなる。
- ・ 個々の児童の課題や問題意識に沿った対応がしやすくなる。
- ・ 授業で全員が発言する場を設けやすくなる。

【30人の学級規模】

- ・ 児童の自立心や責任感などが高まり、3年生以降の発達段階では集団で学ぶ環境が重要となる。
- ・ 多くの人との関わりから、幅広い人間関係や社会性が育ちやすく、また、自身のよさを多く見つけることができる。
- ・ ある程度の人間関係の規模があると、協働的な学びが深まりやすい。
- ・ 多様な考え方にふれるなど、集団での生活を通して自らの考えを深めやすい。
- ・ 特定の児童の言動が集団に影響しづらい。
- ・ 固定的な人間関係が崩れても、他の居場所を見つけやすい。
- ・ 個々の考えや意見を出し合い互いに学び合うという経験により多様な見方や考え方にふれることができる。
- ・ グループ編制のバリエーションが広がり、学級での活動に多様性が生まれる。

◇ 規模に関する意見

- ・ 3、4年生は大事な時期であるため2年生と変化のない25人が望ましい。
- ・ 3、4年生ぐらいまでは25人程度で指導に当たり、子供が成長した5、6年生ぐらいで、集団を少し大きくすることがよい。
- ・ 人間関係に広がりがある方が協働的な学びが深まるなど、集団教育の効果も見られるため3、4年生は30人がよい。
- ・ 将来的に35人など大きな集団になることを考えると、中学年では30人ぐらいの方がよい。
- ・ 少しずつ集団を大きくしていくのがよい。
- ・ いずれ集団を大きくしていくことが望ましいと思うが、その時期がいつなのか難しい。

◇ 考えられる方向性

- 児童一人一人に応じた指導により、学習面や生活面での教育的効果を生むだけではなく、教員の負担軽減にもつながる 25 人学級は、小 3 以降も導入すべきとの意見がある。
- 一方、中学年に入り集団との関わりが広がる時期には、ある程度の学級規模が必要であり、現在の 35 人学級編制の基準を 30 人とする意見もある。
- それぞれの学級規模において考えられる特徴等を考慮しつつ判断すべきである。

◇ 今回、ご意見をいただきたい論点

- 小学校 3 年生及び 4 年生の少人数教育の推進について
- 小学校 5、6 年生以降の少人数教育の推進について